

松下幸之助記念財団 研究助成 研究報告

【氏名】 衛藤安奈(えとうあんな)

【所属】 (助成決定時) 慶應義塾大学法学研究科後期博士課程

【研究題目】

1920年代中国における「労働者運動」再考——武漢を例に——

【研究の目的】

本研究の目的は、1920年代の中国の主要都市で展開された大規模な労働者運動を、社会史的視点から実証的に再検討することを通じ、中国社会と近代化の関係を考察することである。戦後から冷戦期にかけて蓄積されてきた先行研究は、マルクス主義の枠組みに強く規定された視点からのみこの運動を論じようとする傾向があり、中国でしばしば見られた運動の「行きすぎ」(過剰要求、雇い主への暴力・侮辱、市中引き回しなどが横行し、運動が共産党のコントロールから逸脱する現象)を看過する傾向があった。あるいは「行きすぎ」に言及する場合でも、そうした問題をすべて経済問題に帰する傾向があった。しかしこの種の「行きすぎ」現象は1966年から始まった文化大革命に際しても見られたものであり、したがって単なる経済問題から発生したものというよりは、中国社会にすぐれて特徴的な現象といえることができる。

【研究の内容・方法】

研究内容: 研究対象地域として湖北省の武漢に焦点を当てた。近代中国においては外国に向かって開かれた開港都市が民衆運動の発生する重要なポイントであり、武漢にもまた開港都市の一つである漢口が存在し、湖北省の労働者運動の中心地を形成していた。しかし武漢の労働者運動は、その由来をたどると広東から北伐軍とともに持ち込まれたものでもあった。そのため本研究では武漢に持ち込まれた労働者運動の源流でもある広東労働者運動に関しても調査を行なった。

方法: 人々が労働者運動に参加した理由を知るために、労働者のおかれていた社会状況、文化的環境などを社会史的に整理し、労働者運動の発生原因を、革命家や知識人たちの掲げた理念に民衆が単純に共鳴した結果ではなく、民衆の側にもそれなりの利己的な計算が働き、運動が民衆に利用された側面があることに着目した。しかも、その結果として、一見すると労働者たちが一枚岩となって結束したかのように見える労働運動が逆説的に展開されたと考えた。

資料は極力一次資料を用いるようにし、先行研究からは軽視される傾向のあった日本語資料も積極的に使用するようにした。たとえば、日本租界で活動していた日本人の残した諸資料(漢口日本商工会議所の発行した報告書、『日本外交文書』など)である。中国語の資料としては、とくに雑誌・新聞資料と公文書の閲覧・収集に重点を置いた。とりわけ公文書には当時の実態を示す資料が豊富に含まれている。なぜなら労働者運動は当時国民党が樹立した国民政府のもとで、国民党の身分を用いて活動した共産党員が主管したものだったからである。そのためオリジナルの公文書を所有する台湾の国民党文化伝播委員会党史館や、そのマイクロフィルム版を所有するアメリカのスタンフォード大学フーバー研究所を訪問し資料収集を行なった。

【結論・考察】

研究を通じ、中国共産党の公式の歴史では語られていない1920年代の労働者運動の実態があきらかになった。とくに収穫があったのは、工会(労働組合)と糾察隊(ピケット隊)の実態についてである。従来の研究ではこれらの組織はあくまで労働者運動を補助するための組織と位置付けられていた。だが実際には、工会は地縁・職業に基づいて組織された労働者のギルド組織による利益追求のための組織として利用されていた側面が強く、また糾察隊の実態はきわめて傭兵に近いものであった。当時の中国は内戦のために極度に不安定な状況にあり、軍閥の傭兵による略奪が横行していた。そのように過酷な環境下では、労働者は労働運動をみずからの生存のために利用する傾向が強く、そのために運動はしばしば共産党の意図を外れ、お互いの縄張り争いや敵対勢力に対する略奪などに用いられることも少なくなかった。そのため1920年代の労働運動は多くの紛争を引き起こす原因となっていた。